異文化性と教授方策

── 非言語表現を素材に ──

丸井　一郎[1]　奥村　訓代[1]　金　和蓮[2]
（高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科[1]、高知大学人文社会科学研究科修士課程[2]）

Interculturality and didactic strategies: with special regard to nonverbal expressions
Interkulturalitaet und didaktische Strategien: speziell zu nicht verbalen Ausdruecken

Ichiro MARUI[1], Kuniyo OKUMURA[1], Hwaryun KIM[2]
(*Department of International Studies, Faculty of Humanities and Economics;*
[2] *Postgraduate Course for Humanities and Social Sciences*)

1．研究の概要

人文学部改組に伴い設置されて2年を経過した国際社会コミュニケーション学科では、共通教育系統と専門教育系統を通じて、「異文化共有論」「国際コミュニケーション論」「比較文化論入門」「異文化間コミュニケーション論」（日米、日欧、日中異文化コミュニケーション論を含む）「日英米比較文化論」等のほか留学生を対象とした日本文化・日本語コミュニケーションに関する授業を開講し着実に成果を上げている。しかし、新規制定の日本語教員養課程（副専攻、学部独自資格）の教育実習を海外で行うことなど、今後ますます活発化する国際的な大学間交流や外国人研究生・留学生との交流機会の増加を考慮すると、教育の国際化に基づく国際人養成のために、異文化適応教育の教授方法を開発整備する必要性が高まった。つまり、一方向あるいは双方向の異文化理解だけではなく、より実践的に多文化状況に適応する能力の開発が要請されている。そのために基礎的な理論的考察、研究資料・教授素材の収集を行うと同時に、実行可能な教授法の実験的な試みが不可欠である。本論考は高知大学教育改善推進費（学長裁量経費、1999年度）の助成を受けたプロジェクト「異文化適応教育の充実」の成果の一部である。

多文化共生の前提である異文化への適応方策の出発点は、意味産出の様々なレベルと局面で、自他の差違を認知し自覚化することである。これは次章で詳論するように、マクロな要因とミクロなそれとに大別される。前者は広義の比較文化論、国際コミュニケーション論、異文化間コミュニケーション理論等が扱う領域で、制度や機構といった社会的要因も含まれる。（例えば大学の社会的機能が異なれば、大学制度内のコミュニケーション行動にも差異を生じる等。）この領域での問題は、いわば目に見えやすく、知識の伝授など事前の訓練によってある程度対処できるものが多いと思われる。一方、個々の実践の場で参加者自身に多大な困難を引き起こし、様々な解決不可能と見える問題の原因となるのはミクロな要因のレベルにより多く見られる。具体的には個々の対人相互行為事象における意味産出方式の差異である。本論考では理論的考察（第2章）の後でミクロレベルの事象に焦点を当てた試みと（第3章）、教授方策の実践に関して（第4章）報告する。

2．異文化性の諸領域とその要因

上で示唆したが、いわゆるコミュニケーションにおける文化的な差異（異文化性）が本論文の中心的対象である。ここでは、近年その用法が拡大しすぎたきらいのある「コミュニケーション」ではなく、より広く人間主体間の働きかけ一般を意味する「相互行為」の用語を採用する。相互行為では、言語的非言語的手段で、間主体的に了解可能な意味が産出される。異文化適応に関する問題の核心は、この意味産出のメカニズムが社会・文化集団ごとに同一ではないことに起因する。異文化適応とは、異文化性つまり自己のとは異なる意味産出方式の認知、対象化、学習の過程を言う。ここでは主体間の了解を指向する相互行為が中心テーマであるが、個々の行為や事物の意味は、背景的な意義関連の体系、つまりコンテクスト上で初めて当の「意味」を持つ。従って個々の意味産出の直接のコンテクストの背後に、いわば行為外に、従来歴史的、社会的、文化的な背景事情と言われてきたマクロなコンテクストの体系があることを考慮する必要がある。これを異文化性の諸領域と呼ぶ。

異文化性の諸領域を、その特性に応じて、以下のように分類する。これは作業のための操作的な分類である。

①個々の行為の前後で変化しないようなマクロの領域とその要因

これを行為外的な領域と要因と呼ぶ。行為外的な領域にはさらに「ハードな」要因と「ソフトな」要因とを区別する。ハードな要因には、端的には歴史的に形成されてきた社会体制、生産体制、大小の制度・機構や地理的風土的与件及びそれらの構成要因が属する。ソフトな要因とは歴史的に累積された一集団の全表象体系のことである。大は宇宙観から小は日常性の構成とその身体性における刻印に及ぶ。簡単に言うと、「芋虫は食べておいしいか」あるいは「初対面の人と同じ酒杯から飲めるか」と問われて、ある集団内で共通に想起される表象が後者の典型である。（あるドイツ人外交官は、日本の高級料亭の宴席で、薄い汁の中を泳ぐ白魚を供されて、絶句したまま脂汗を流しつつ嘔吐に耐えていた。）キリスト教文化圏でパンとワインの持つ特別な意味と象徴性もこの領域のソフトな要因である。言語学的には、言語行為の意味に関わる百科全書的知識と言える。

②個々の行為のミクロな領域とそれを直接かつ内的に構成する要因

これは行為内的な領域と要因である。ここでもハードな要因とソフトなそれとを区別する。前者は行為の直接的コンテクストを端的に構成する事や物である。例えば駅の待合室か病院か、自宅か路上かといった要因である。個々の事象についてマクロな要因に起因する予件を識別することができる。ソフトな要因はこの論文の元来の課題である。これはその場で、行為を通じて産出される間主体的な了解過程を認知的に構成する記号的なプロセスのことである。最も端的な要因は言語表現である。ただしここでは非連続性によって特徴づけられる言語表現のいわば「ディジタルな」体系と、非言語表現の「アナログな」それとを区別する。後者は音韻論的でない音声表現を含む。異文化性ということでは、言語の差異は最も分かりやすく明らかな要因である。従ってこれまで非自覚的であれ、何らかの意味で異文化理解、異文化適応に関わる学習の中心は「外国語科目」の履修であった。非言語表現はせいぜい付け足しの扱いである。しかし言語表現の側面はいわば「下地」ではなく「図柄」であって、「下地」からの意味作用はむしろアナログな非言語表現に多く現れる。以上の分類を整理しよう。

＜異文化性の諸領域と要因＞

行為外的領域 ― ハードな要因
　　└ ソフトな要因

行為内的領域 ― ハードな要因
　　└ ソフトな要因 ― ディジタルな要因（言語表現）
　　　　└ アナログな要因（非言語表現）

3．事例研究：非言語表現の異文化性

3．1．課題と作業の概略

意味作用の差違の認知と自覚が、相互行為（ここでは「コミュニケーション行動」と同義）のミクロで局地的なレベルに関して、どのように具体化されうるか、また同時に教授法的対象としてその操作的な取り扱いが可能となるかを検証する。その際特に留意したのは、いわばアイテム化して個々に伝達可能な知見を集積するのでなく、学習者自身の探索、発見、認知、対象化の過程が、そのようなものとして共に学ぶ仲間に共有されうる教授方法を開発することである。これに関して重点を置いたのは、近年小型機器の開発と普及がめざましく進んでいるディジタル化された映像と音響の処理手段を活用することである。その準備段階として、まず非言語表現の異文化間比較のための事例集（＝電子事典）を作成した。

非言語表現の相互行為上の意味機能は文化的に差違が大きく、異文化適応の方策を創出する上で考慮すべき重要な部分領域をなす。この領域での理解の困難は、音韻体系に基礎を置く音声言語と異なり、記号体形成の原理がいわばアナログ的であり（＝非連続的ではなく）、分節様式が共有されていない事にある。従って、場合によっては、この領域での差違自体に自覚的な意識が向かないこともあり得るわけで、個々の事例の取り扱いはさることながら、非言語記号の意味作用それ自体に注目させる事が出来るような形で資料が提示出来ることが望ましい。このことから学習者に自然に共感を呼び起こすような映像情報の効果的な提示が重要である。そのために対象となる非言語記号の範囲を構想し、具体化し、確定する手順や記録の方法について調査協力者との事前の調整や的確な指示を与えることも重要となる。

非言語記号の文化的差違を電子映像として記録整理し、後発の学習者のためにパソコンで利用しやすい形で提供することを具体的作業目標とした。また後発の学習者自身が同様の試みをする事に対して励ましとなるような形式の開発に努めた。人文学部人文学科国際コミュニケーションコース、同国際社会コミュニケーション学科所属の学生、及び各国（中国４名、アメリカ１名、オーストラリア２名、インドネシア１名、韓国１名、ポーランド２名）の留学生に協力を依頼し、調査対象、作業手順、最終産物のデザインについて、作業期間中はほぼ毎日のように調整を行った。[1)]

作業の中心はディジタルヴィデオカメラで撮影した協力者達の主として非言語的な表現をディジタル映像処理し、これを編集し、HTML形式で閲覧可能な形に集約した。普及したブラウザーソフトを利用することは後発の学習者にも有利である。最終的に整理し、CD-ROMに収録する際に、さらに学習者の自学自習の参考になるインターネット上の様々なホームページに関する情報を付加した。URLのクリックによって学習者はすぐに参照サイトに接続できる。この作業を通じて、その場で確認し処理ができる携帯可能な高性能パソコンと、これに直接接続しデータ処理のできるディジタルヴィデオカメラが非常に有用であった。

CD＝ROM１枚に以下のような情報を収録した。（非言語表現の手段は非常に多様で、厳密な意

味では「ジェスチャー」に限定されないが、学習者への親しみやすさを考慮して、ＣＤ資料内ではこの用語を使用した。)

①特定の意味に対応する非言語表現の映像と音声記録

i) 相互行為自体

はじめまして、ありがとう、さようなら、静かに！、お願いします、分からない

考えてます、だめ、OK、(子供を) ほめる

ii) 行為随伴的、描写的　その他

泣く、うれしい、臭い、怒る、食べる、飲む、お金、私

(記録事例が揃わずＣＤには収録しなかったもの、今後の課題である：はい、いいえ、話を始める、話を中断する、～を下さい、ごめんなさい、恥ずかしい、など)

ii) 特定の非言語表現の意味の可能性

親指をたてる、 小指をたてる、Ｖ－サイン

iv) 日本特有の手招き表現の解釈可能性

②関連領域の学習参考用リンク集（抜粋、URL省略）

i) 非言語表現に関して

「ポルトガルで体験したジェスチャーの違い」

The Evolution of Hands and Gesture in Communication, Our hands and fingers are tools for communication.

ノンヴァーバル・コミュニケーション

手話

手話単語辞典

アメリカ手話アニメーション辞典

ii) 関連の学術研究機関

言語に関するＬＩＮＫ：学会のホームページを中心に20のリンク

ARIADNE（人文学系総合サイト、目次例：言語学・心理学と認知科学・日本語・日本文学・音楽・美術・映画／映像　）

音声学：音声学に関する学会・研究会、音声・音韻研究者、出版社、アーカイブ／ソフトウェアなどの約80サイト

国際コミュニケーション学会（The International Communication Association）

日本コミュニケーション学会（Communication Association of Japan）

国内言語学関連研究機関WWWページリスト（目次：学会 | 北海道 | 東北 | 関東 | 中部 | 近畿 | 中国 | 四国 | 九州 | 外国、 プロジェクト・研究会 | 研究者 | リンク集 | 電子辞書・検索等 | 言語地図 | 多言語処理 | 出版、書籍流通 | 資料展示等 |

Universities and Academic Sites：24ヶ国のさまざまな研究室のリスト

ＣＤ資料を実見すれば分かるが、ディジタルな記号体でない非言語表現は、現前する人物の人格に統合された身体的音声的表現の全体であることが理解される。これは収録に際して事前の準備を通じて、できるだけ親しみのもてる雰囲気を確保できた成果であると考えられる。専門的に言えば、相互行為の前提である十全な相互性が観察者と協力者の間に成立していたということである。むろ

んこのことは異文化接触事象で常に保証されているわけではないことも付記する。教授法上の課題の一つである。非言語表現の記号的機能の文化的な差違の分布も興味深い。詳細は次節に譲るが、例えば、小指をたてる仕草（日本で特定類の女性を表す）は全ての被験者の文化グループで理解不可能であった。逆に親指を突き出す仕草は、全てのグループで「最高」や「OK」といった積極的な意味合いの表現に使用されるが、日本での認知度は低いと思われる。日本流の手招き動作（「こちらへ来い」の意）は一部の地域では全く理解不可能で奇異なものと判断されることも興味深い。パイロット的な作業としては一定の成果を達成したと考える。それにもまして重要なことは、それなりの指示を与えれば、この程度の電子資料集・教材を学習者自身が作成できる見通しが立ったという点である。このことが持つ教授法上の意味合いは下で検討する。その前に次節で、不完全とはいえ今回集められた資料の中心部分を紹介し、分類と分析の端緒を探る。

3．2．事例の記述と解釈

3．2．1．個々の事例の記述

以下では記録された事例を記述し、特徴をコメントする。日本人の事例に関する個々の記述は省略するが、コメントの中では触れることがある。画像は代表的なものを一括して巻末の付録に収録してある。

ありがとう（映像資料1、以下同様）
中国1：　顔の前で両手を合わせる。
中国2：　胸の前で、右手は握り、左手はその右手を上から包むように覆う。
中国3：　頭を下げる。
韓　国：　胸の前で両手を合わせ、頭を下げる。
　　胸の前で両手を合わせ、笑顔で頭を傾ける。
オーストラリア2：　握手しながら顔を立てに振る。
ポーランド2：　顔の前で両手を合わせる

コメント：中、韓、日で共通する。いずれにせよ記号化の程度は高い。「実行的」な、つまり何かを描写するのでなく、その仕草の提示が特定の意味の社会的行為（感謝）の実行となる表現である。

うれしい（資料2）
中国4：　拍手する。
オーストラリア1：　両手ともこぶしを握り、ひじを曲げ、そのこぶしを自分の胸に引き寄せる。
オーストラリア2：　両肘を曲げ、両手を顔の両側まで挙げ、指を開く。叫ぶしぐさ。
　　両肘を曲げ、両手を頭の上まで挙げ、こぶしを握る。叫ぶしぐさ。
アメリカ：　両手ともこぶしを握り、腕を伸ばし上方に突き上げる。
韓　国：　両腕を胸の前で交差させ、右手で左の上腕部を、左手で右の上腕部をつかみ、
　　上半身を左右にひねらす。
ポーランド2：　両手ともにこぶしを握り、ファイティングポーズから、片手を突き上げ、もう片手は引くしぐさ。

コメント：　いずれも自発的な心理的生理的表出の模倣、再現の性格が強い。

お願いします（資料３）

中国４：　手を胸の前で合わせ、頭を下げる。
インドネシア：　頭を下げる。
韓　国：　手を胸の前で合わせ、頭を下げる。
　　胸の前で、指を交互に差し入れるように手を合わせ、頭を下げる。
オーストラリア２：　手を胸の前で合わせる。(他からの影響あり？)

コメント：頭を下げるか手を合わすかである。「実行的」な性格が明らか。

お金（資料４）

中国１：　親指と人差し指で輪を作り、他の指は伸ばした状態で、手のひらを上に向け、相手に輪を向ける。
　　親指と人差し指と中指をこすり合わせ、相手に甲を向ける。紙幣を数えるしぐさ
中国２：　親指と人差し指で輪を作り、他の指は伸ばした状態で手のひらを相手に向ける。
　　親指と人差し指で輪を作り、他の指は伸ばした状態で、手のひらを上に向け、相手に輪を向ける。
中国３：　親指と人差し指と中指をこすり合わせ、相手に甲を向ける。
中国４：　親指と人差し指と中指をこすり合わせ、手のひらを上に向ける。
オーストラリア１：　親指と人差し指と中指をこすり合わせ、相手に甲を向ける。
オーストラリア２：　親指と人差し指と中指をこすり合わせ、相手に甲を向ける。
アメリカ：　左手の平に右手の甲を2,3度打ち付ける。
インドネシア：　親指と人差し指と中指をこすり合わせ、相手に甲を向ける。
韓国：　親指と人差し指で輪を作り、他の指は伸ばした状態で、手のひらを相手に向ける。
ポーランド１：　親指と人差し指で輪を作り、他の指は伸ばした状態で、手のひらを相手に向ける。
ポーランド２：　親指と人差し指で輪を作り、他の指は伸ばした状態で、手のひらを相手に向ける。

コメント：　硬貨の形態を模したもの（中、韓、日、ポーランド)、札を数える仕草を模したもの（中、豪、インドネシア、)、札を「耳を揃えて」はたく動作の模倣的再現（米)。

さようなら（資料５）

中国１：　片手をあごの辺りまで挙げ、手のひらを相手に見せ、横に振る。
中国２：　片手をあごの辺りまで挙げ、手のひらを相手に見せ、横に振る。
中国３：　片手をあごの辺りまで挙げ、手のひらを相手に見せ、横に振る。
中国４：　片手をあごの辺りまで挙げ、手のひらを相手に見せ、横に振る。
オーストラリア１：　片手をあごの辺りまで挙げる。
オーストラリア２：　片手をあごの辺りまで挙げ、手のひらを相手に見せ、横に振る。
アメリカ：　片手をあごの辺りまで挙げる。
　　相手の肩を軽く叩く。
インドネシア：　片手をあごの辺りまで挙げ、手のひらを相手に見せ、横に振る。
韓国：　片手をあごの辺りまで挙げ、手のひらを相手に見せ、横に振る。
　　片手をあごの辺りまで挙げ、手のひらを相手に見せ、指先を何度もくっつける。
ポーランド１：　片手をあごの辺りまで挙げ、手のひらを相手に見せ、横に振る。

ポーランド２：　片手をあごの辺りまで挙げ、手のひらを相手に見せ、横に振る。

コメント：　今回の調査では親しい間柄という条件だったので、手を振るという共通な動作になったと思われる。関係が疎遠な場合には違った表現になると思われる。いずれも模倣表現ではなく、「実行的」な記号表現である。

ダメ（資料６）

中国２：　両手ともに人差し指を立て、その人差し指を交差させる。
中国４：　両手を胸の前で交差させる。手のひらは身体と垂直にする。
インドネシア：　頭を横に振る。
　手を顔の前で横に振る。
オーストラリア２：　頭を横に振る。
　両手ともに人差し指を立て、その人差し指を交差させる。
韓国：　頭を横に振る。
ポーランド１：　両手ともに指を広げ、顔の前に前後一列に指を上にして並べ指を動かす。
　左腕を胸の前で直角に折り曲げ、手はこぶしを握り甲を相手に向ける。
　右手もこぶしを握り、左腕の上腕部に載せる。
ポーランド２：　両手ともに指を広げ、顔の前に前後一列に指を上にして並べ指を動かす。
　左腕を胸の前で直角に折り曲げ、手はこぶしを握り甲を相手に向ける。
　右手もこぶしを握り、左腕の上腕部に載せる。

コメント：　いわゆる「×印」が多い。または手や顔を横に振る。ポーランドの事例の最初のは他の中部ヨーロッパ地域でも見られる「からかい」の仕草である。「実行的」な表現である。二番目のは来歴が分からない。

わからない（資料７）

中国１：　首を横に振る。
中国２：　ひじを曲げ、両手を開いて手のひらを上に向ける。
中国３：　首を横に振る。
オーストラリア２：　頭を傾けて、首を横に振る。
　ひじを曲げ、両手を開いて手のひらを上に向ける。首をすぼめる。
韓国：　頭を傾け、片手を頭の横に持っていき、手のひらを相手に見せ、左右に振る。
ポーランド１：　ひじを曲げ、両手を開いて手のひらを上に向ける。首をすぼめる。
ポーランド２：　ひじを曲げ、両手を開いて手のひらを上に向ける。首をすぼめる。

コメント：　首を横に振る、すぼめる、手を横に振る、手を広げるなどであるが、困惑の表情が共通する。実行的表現である。

飲む（資料８）

中国１：　コップを持って飲むようなしぐさ。
中国２：　コップを持って飲むようなしぐさ。
中国３：　コップを持って飲むようなしぐさ。

オーストラリア１： コップを持って飲むようなしぐさ。
オーストラリア２： コップを持って飲むようなしぐさ。
アメリカ： 親指をと小指を立て、他の指をまるめた手を顔の前にもってきて、親指のほうを自分側に向ける。その手を揺らす。
インドネシア： コップを持って飲むようなしぐさ。
韓国： コップを持って飲むようなしぐさ。
ポーランド１： (お酒) 片手を手の甲を上にして、小指側の側面で首を叩く。
(水) コップを持って飲むようなしぐさ。
ポーランド２： (お酒) 片手を手の甲を上にして、小指側の側面で首を叩く。
(水) コップを持って飲むようなしぐさ。

コメント： これについては、身体的動作の模倣的再現のみが出現すると予測されたが、ポーランドの例では意外にも高度に記号化された表現が見られた。個別文化的な特異性である。酒を喉まで飲む (痛飲する) という意味であろうか。

泣く (資料９)
中国１： 両手の人差し指で、目の下を上下に指す (涙であろう)。
中国２： 片手を軽く握り、交互に涙を拭くしぐさ。
中国３： 片手を軽く曲げ、目の前で左右に動かす。
中国４： 両手で両目を覆う。
アメリカ： 両手の人差し指で両目の下を拭くしぐさ。
インドネシア： 片手を軽く曲げ、片目の前で左右に動かす。
オーストラリア２： 軽く握った両手を両目に当てる。
韓国： 片手を顔の側面に持っていき、人差し指で涙を拭くしぐさ。
片手を鼻の下に持っていき、鼻をすするしぐさ。
軽く握った両手を両目に当てる。
ポーランド１： 軽く握った両手を両目に当てる。
ポーランド２： 口を固く閉じ、目をパチパチする。

コメント： ほぼ全てが自発動作の模倣である。一例のみ形態 (涙) の模倣がある。

考え中 (資料１０)
中国１： 片手で顔の半分を覆い、上下に移動させる。
中国２： 片手の人差し指を立て、他の指を円め、その指でこめかみの辺りに円を描く。
片手をあごの下にもっていき、あごに手の甲をつけ、頭を傾ける。
中国４： 片手の人差し指を立て、他の指を円め、その指でこめかみを指しながら、頭を傾ける。表情をしかめる。
オーストラリア１： ひじを曲げ､両手を上に向け左右に広げる。頭を横に傾け、表情をしかめる。
オーストラリア２： 頭を前方に傾け、片手を頭に添え、表情をしかめる。
アメリカ： 片手の人差し指を立て、他の指を円め、その指で眉間を指し表情をしかめる。
韓国： こめかみを、開いた状態の手の人差し指、または中指で指し頭を傾ける。表情をしかめる。
片手をあごに持っていき、もう片手でそのひじを支え、頭を傾ける。表情をしかめる。

ポーランド１：　片手を頭の側面に持っていき、軽く握った手で指を動かす。
　　軽く頭を傾け、表情をしかめる。
ポーランド２：　人差し指を伸ばし、他の指をまるめた状態の両手を、両こめかみに持っていき、
　　人差し指はこめかみを指し、まるめた指を頬に乗せ、人差し指　を上下させる。

コメント：　頭のどこかに手を当てる、表情を曇らせる点で共通する。

子どもを誉める（資料11）
中国２：　子どもの頭をなでる。
オーストラリア１：　子どもの頭をなでる。
オーストラリア２：　笑顔で、何度もうなづく。
アメリカ：　子どもの頭をなでる。
インドネシア：　拍手する。
韓国：　子どもの頭をなでる。
ポーランド１：　子どもの頭をなでる。
ポーランド２：　子どもの頭をなでる。

コメント：　インドネシアのみ頭をなでる動作がない。逆に頭をなでると誉めることになるのはなぜかが疑問となる。

私（資料12）
中国１：　指を伸ばした状態で自分の胸を手のひらで叩く。
中国２：　指を開いた状態で手のひら全体で自分の胸に触れる。
中国３：　親指を立て他の指を丸め、それらの指を上にし、親指で自分の方を指す。
　　指を伸ばした状態で自分の胸を手のひらで叩く。
中国４：　人差し指で自分の鼻を指す。
オーストラリア１：　指を伸ばした状態で、手の甲を上にして指で自分の胸を指す。
オーストラリア２：　指を伸ばした状態で、手の甲を上にして指で自分の胸を指す。
アメリカ：　指を軽く伸ばした状態で、小指側の側面で自分の胸を叩く。
インドネシア：　指を伸ばした状態で、手の甲を上にして指で自分の胸を指す。
韓国：　指を伸ばした状態で自分の胸を手のひらで叩く。
ポーランド１：　指を伸ばした状態で、手の甲を上にして指で自分の胸を指す。
ポーランド２：　両手で、指を伸ばした状態で、手の甲を上にして指で自分の胸を指す。

コメント：　自分のどこをどのように指し示すかが変異のポイント。胸を指し示す方が一般的で、日本流に鼻を示すのは少数である。単に示すのではなく、胸に対して手が近づく動作が特徴的である。

臭い（資料13）
中国２：　顔をしかめて、顔の前で、親指を自分に向けた手を左右に振る。
中国３：　顔をしかめて、顔の前で、親指を自分に向けた手を左右に振る。
中国４：　鼻に手を当てる。

オーストラリア１：　顔をしかめて、顔の前で、親指を自分に向けた手を左右に振る。
オーストラリア２：　顔をそむけて鼻をつまむ。
アメリカ：　顔をしかめて、顔の前で、親指を自分に向けた手を左右に振る。
インドネシア：　鼻をつまむ。
韓国：　顔をしかめて、顔の前で、親指を自分に向けた手を左右に振る。
　　人差し指を軽く曲げ、他の指をまるめた状態の手を鼻にもっていく。
ポーランド１：　鼻をつまむ。
ポーランド２：　鼻をつまむ。

コメント：　嗅覚器官である鼻を巡る動作で全て共通する。差違が少ない。

初めまして（資料14）
中国１：　握手する。
オーストラリア１：　握手する。
オーストラリア２：　握手する。
アメリカ：　握手する。
インドネシア：　握手する。
韓国：　お辞儀する。
　　握手する。
ポーランド１：　握手する。
ポーランド２：　握手する。

コメント：　握手が多数。韓・日のお辞儀との差違が明白。韓・日でも握手が増加？

食べる（資料15）
中国１：　片手で皿を作り、もう片手で箸を持って食べるようなしぐさ。
中国２：　片手で皿を作り、もう片手で箸を持って食べるようなしぐさ。
中国３：　片手で皿を作り、もう片手で箸を持って食べるようなしぐさ。
オーストラリア２：　片手で皿を作り、もう片手の指４本で口に入れるようなしぐさ。
韓国：　片手で皿を作り、もう片手で箸を持って食べるようなしぐさ。
ポーランド１：　食べ物を持ったような手を口に持っていき、軽く口を動かす。
ポーランド２：　食べ物を持ったような手を口に持っていき、軽く口を動かす。

コメント：　食べる動作の模倣的再現は共通するが、箸の使用の有無によって明確に分かれる。

数の数え方（資料16）
中国（？）：　相手に手の甲を向けた状態から。
　　１＝人差し指を立てる。
　　２＝人差し指と中指を立てる。
　　３＝人差し指と中指と薬指を立てる。
　　４＝人差し指と中指と薬指と小指を立てる。
　　５＝親指を立てる。

6＝親指と小指を立てる。
7＝指先を全部くっつける。
8＝親指と人差し指を立てる。
9＝人差し指だけ軽く曲げ、他の指は握り、小指側の側面を相手に見せる。
10＝こぶし。

ポーランド1：　こぶしを握り、甲を下にした状態から。
親指から順に立てていき、立てた指をもう片方の人差し指で指す。
6からは左右の手が逆になる。

ポーランド2：　こぶしの握り、相手に甲を向けた状態から。
親指から立てていく。6からまた繰り返し。

コメント：　いずれのグループも日本流との差違が明確である。

静かに（資料17）

中国1：　人差し指を立て、他の指をまるめ、その人差し指を口に当てる。
中国2：　人差し指を立て、他の指をまるめ、その人差し指を口に当てる。
中国3：　人差し指を立て、他の指をまるめ、その人差し指を口に当てる。
中国4：　人差し指を立て、他の指をまるめ、その人差し指を口に当てる。
インドネシア：　人差し指を立て、他の指をまるめ、その人差し指を口に当てる。
指を開いた手を斜め下に手の甲を上に差し出し、軽く上下させる。
オーストラリア2：　人差し指を立て、他の指をまるめ、その人差し指を口に当てる。
韓国：　人差し指を立て、他の指をまるめ、その人差し指を口に当てる。
ポーランド1：　人差し指を立て、他の指をまるめ、その人差し指を口に当てる。
ポーランド2：　人差し指を立て、他の指をまるめ、その人差し指を口に当てる。

コメント：　口元に人差し指を当てることが共通。人差し指が禁止や制止に使用されることは一般的であり、興味深い。

O.K（資料18）

中国2：　親指と人差し指で輪を作り、他の指は伸ばし、手のひらを相手に向ける。
中国3：　親指と人差し指で輪を作り、他の指は伸ばし、手のひらを相手に向ける。
中国4：　親指と人差し指で輪を作り、他の指は伸ばし、手のひらを相手に向ける。
韓国：　親指と人差し指で輪を作り、他の指は伸ばし、手のひらを相手に向ける。
オーストラリア2：　親指と人差し指で輪を作り、他の指は伸ばし、手のひらを相手に向ける。
うなづく。
ポーランド1：　親指と人差し指で輪を作り、他の指は伸ばし、手のひらを相手に向ける。
親指と人差し指をくっつけ、他の指はまるめた状態で手のひらを相手に向ける。
ポーランド2：　親指と人差し指で輪を作り、他の指は伸ばし、手のひらを相手に向ける。

コメント：　近年では世界各地で一般化していると思われる。

怒る（資料19）
オーストラリア１：　片手で相手を殴るしぐさ。(こぶし、または平手)
オーストラリア２：　口を固く閉じ、こぶしを握り顔の辺りまで突き上げ、相手にその甲を見せる。
韓国：　両手を腰に当て、怒った顔をする。

コメント：　自発的動作の再現的な模倣。ただしオーストラリア２の例はやや記号化されている。

３．２．２．分類と性格付けの試み

以上の事例に付されたコメントにも示唆されているように、記録した非言語表現にはいくつかの類型がある。その単純な分類を試みる。「ジェスチャー」に関する民俗誌的記述については、音声の産出から衣服までを含めたKoechlin(1992)の非常に包括的な定義があるが、やや広すぎて応用をもてあます。本論考の問題である進行する実際の相互行為中の非言語表現については、Streeck／Knapp(1992)の優れた論考がある。我々の事例は、いわば相互行為の流れから取り出され孤立しているので、上記著者らの分類の視点はそのまま適用できないが、いくつかの点で参考にすることは出来る。特に彼らの主張するように、言語表現と非言語表現を別個に扱うのではなく、対面談話の形で進行する相互行為の中で、その意味を作り出す個々の表現行為として、共に働く記号（シンボル）であるという観点（ibid. 5）は非常に重要であり、今後の研究に指針を与える。[2)]

まず第一に模写的性格の強い類型がある。これには「食べる」「飲む」など自発的生理的な動作の再現に関わるものと、「お金」など事物のイコン的提示に当たるものがある。後者は各集団内での記号化が一定程度進んでいる場合が多いと考えられるが、前者はその場限りのパフォーマンスに当たる事例など変異が大きい。他人の行動の模写などもこれに属する。

第二のグループは「ありがとう」「お願いします」(いずれにも手を合わせる動作によるものがある）などのように、伝わるべき意味と表現の間に第一の類型ほどの類縁関係が無く、より強く抽象化され規約化された、つまり記号化された類型である。この類は、全てではないが、多くがコメントで言及した「実行的」な性格、つまりそれを提示すること自体がある特定の行為を実現することになるという性質を持つことで特徴づけられる。

第一の類型では、非言語表現とその意味の間に自然的な類似関係が見られるが、上で述べた異文化性の行為外的な要因に関連する差違も散見する。例えば、食べるのに箸を用いることが表現されるか否かである。またここには無いが、良く知られた例として、十字を表す動作は、キリスト教とその制度への関連づけなしには理解できない。

第二の類型では記号としての性格が明確であるだけに、文化間の差違も大きい。上の「だめ」ではいわゆる「×印」が有意か否かに差違が見られた。ポーランドの事例も知識がなければ認識不可能である。第二類のうち「実行的」な表現は元来相互行為の流れの中で、そのマネージメントに重要な働きをしていると考えられるので、集団特有の意味づけによって、相互に誤解や無理解・別理解の可能性が大きくなる。なお記号的性格の強い第二類の中には、日本の事例である「小指」のように、その直接的な起源を類推することが困難である非実行的な類も含まれる。また非実行的であるが、行為に付随する認知過程の拠り所として働くものに数の表現がある。これも文化的差違が行為の直接的な困難に結びつく。またこの元来非実行的な表現も、上で見たポーランド（及び広くヨーロッパ）で一般的なように、「枚挙する」「列挙する」という行為実行タイプとして使用されうる。(一方の手の指で他方の手の指を順次指し示しながら枚挙する。）相互行為への関連は今回は集中的に取り扱えないが、「ありがとう」「さようなら」など行為の中でのみ有意義な表現への注目が重要である。典型的に行為内的な異文化性の領域である。

4．教授方策の展望：発見法的な教授・学習法を目指して

移住などによる異文化・異言語の自然的でかつ不可避の体験ではなく、それらを大学など制度の中で「人工的に」教授学習することには、独自で特有の問題がつきまとう。差違について、いわばメタコミュニケーションとして語ることは必要であり、比較的容易である。難しいのは、差違をそれと認知できる形で提示し、かつ学習者自身の（追）体験を経て、模倣的再現や意図的活用が可能なように、教授学習の対象とその場自体を構成することである。まさしく「プディンの味は食べてみなければ分からない」のである。従って可能であれば差違に関わる対象の事物それ自体を提供することも必要である。しかしこれにも困難は常に潜在する。表現も事物も元来のコンテクストから分離され、別のコンテクストに持ち込まれれば別の意味を帯びる可能性が大きいからである。例えば「パン」といえば大半の日本人学習者がイメージするのは、ヨーロッパでは菓子でしかないような柔らかく多かれ少なかれ甘みのある製品であろう。「人はパンだけで生きるのではない」という新約聖書の表現からヨーロッパ人の多くが想起するのは重さが1キログラム以上時には5キログラムもあり、塩味と相応の大きさと堅さとを持った物体である。日本の菓子のようなパンで長期に亘って命をつなぐことは様々な事情で難しい。では実物を提供すればよいのか。むろんある程度までは差違を体験させる効果があるだろう。我々も実際にそれを試みてはいる。しかしそれでは伝わらないものの大きさに立ちつくすこともまた事実である。「やっぱり私日本の柔らかいパンが好きです。」という反応を結果するのでは、努力が水の泡である。近代以降の日本の食文化における「あんパン」とは何なのか「饅頭の文化」とは何なのか、という自己対象化さえおぼつかない。一言では約言できない歴史的に形成された重層的なイメージの山をどう教授法的に媒介するか。試みるべきことは極めて多い。

事物よりもさらに困難な教授・学習の対象は相互行為における行為内的な意味作用の差違である。この領域では上で述べた、差違を認知し、追体験し、対象化し、模倣し、意図的に活用するという過程を教授法的にコントロールしながら進めていく手順とその枠組みとしての「場」を保証する必要がある。我々は、この点で著者の一人である奥村の「異文化共有論」における試みが新しい方向を指し示しえていると考える。詳細は奥村の論（「『日本事情』一つの新しい方向性 — 国際化教育の旗手として」）及び対応する教材（「異文化共有論」）を参照されたい。ここでは本論考に関わる要点だけを紹介する。

高知大学の共通教育科目として開講されている「異文化共有論」における試みから出発し、具体化されてきた方法は、発見法的な教授・学習法である。その枠内で日本人学生と留学生とが同数で学び、互いに互いの差違同一を確認する。留学生はどこかの異文化の代表者や見本ではない。日本人学習者も他者の視線で対象化される。教授法化された取り扱いでは、上で述べた異文化性の諸領域の複数領域にまたがって教授学習対象が提供される。さらに重要なことは対象について一方的に講義するのでなく、対象項目自体を体験できるよう授業の相互行為自体が組織されることである。例えば、「名刺交換」（名刺はその場で各自が自作する）や「じゃんけん必敗法」（負けることを目指して競技する）「ことばクイズ」「ジェスチャー」などである。なお最後に挙げた項目は、本論考で取り扱う一般的理論的な意味で非言語表現の一部ではあるが、記号的でなく、より多く遊技の性格を与えられている（「バナナを食べながら自転車に乗っているサル」といった課題）。

これらの試みが一定の学習上の効果をもたらすことは、学習者へのアンケート調査によっても確認されている（上記の奥村の論を見よ）。ただしそのアンケートからも分かるが、全ての学部学生を対象とする開講科目である事情で、自己認識・他者認識の対象項目が行為外的な要因に集中し、

より高度な異文化適応能力の要因である相互行為自体（＝行為内的領域）のマネージメントに関わるものが少ない。国際社会コミュニケーション学科の教育目標に合致させるには、行為内的領域での訓練が不可欠であり、それが本論考の認識関心でもある。とはいえ奥村の試みは確実に一定の成果を上げていると考えられるので、いわば精度を上げて、異文化性のより微細な領域でその試みを継続していきたい。その際考慮すべき重要な要因の一つが非言語表現と言語表現の相互行為における意味産出への共同現象である。今回は詳論する余裕がないが、非言語表現の差違による異文化間の重大な齟齬の事例も多い（丸井1999,143[3]）。記号化の度合いが低く目立たない非言語表現も、言語表現という図柄の下地として、コンテクストへの関連づけを制御する重要な「目印」の働きをするからである。[4]

相互行為における異文化性の媒介と異文化適応能力の養成に関わって、非言語表現と言語表現の一体的な教授法的取り扱いの指針は、上で述べた発見法的教授・学習法である。音声面を含む非言語表現への注意喚起の方策としては、学習者自身による映像・音声資料の作成と、学習者自身の相互検討が有効であると予測される。実際的には上（３．１．）で述べた方法を用いるが、教室の相互行為をどう組織するかが重要課題である。

注

1）調査に参加した学生諸君、また資料の作成に協力した知名誠氏に感謝する。

2）イスラエル内の多文化性と非言語表現に関する出身地域別の差違を研究した論考に Schneller (1992) がある。

3）問題は非言語表現と言語表現の通用領域の分布が異なる点にある。例えば日独の商店など売買に関する場面の対比では、ドイツ語圏において言語化の要請が顕著である。

4）場面内指示（deixis）という限られた分野であるが、図と下地の関連から論究したものに Roth (2000) がある。

参考文献及び教材

奥村訓代：「日本事情」一つの新しい方向性 — 国際化教育の旗手として、「国際社会文化研究」 第１号、53−70、2000

奥村訓代：異文化共有論、凡人社、2000、(教材)

Koechlin, Bernard : Prolegomena to the Elaboration of a New Discipline: Ethnogestics, Poyatos, F. (ed.), Advandces in Nonverbal Communication, 59-76, John Benjamins Pub. Co., 1992

丸井一郎：異文化間相互行為理論の基礎 − 文化とコミュニケーション −、人文科学研究（高知大学人文学部)、第６号、125−147、1998

丸井一郎：言語相互行為における意義関連体系としての個的領域と共有領域 − 日独対照の視点から −、高知大学学術研究報告、第48巻、135−160、1999

Roth, Wolff-Michael: From Gesture to Scientific Language, Journal of Pragmatics, Vol. 32, No. 11, 1683-1714, 2000

Schneller, Raphael: Many Gestures, Many Meanings: Nonverbal Diversity in Israel, Poyatos, F(ed.), "Advances in Nonverbal Communication", 213-236, John Benjamins Pub. Co., 1992

Streeck, Juergen ／ Knapp, Mark L. : The Interaction of Visual and Verbal Features in Human Communication, Poyatos, F(ed.), "Advances in Nonverbal Communication", 3-24, John Benjamins Pub. Co., 1992

平成12年（2000）９月30日受理
平成12年（2000）12月25日発行

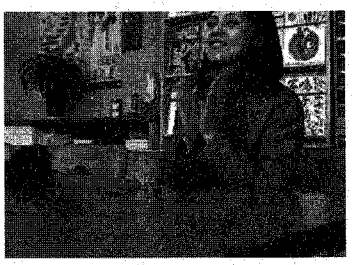
付録（映像資料）

資料 1





資料 2


資料 3






資料 4



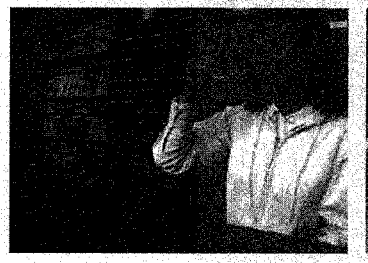
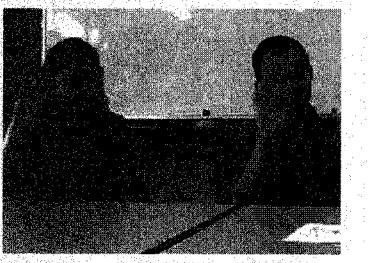





資料5





資料6



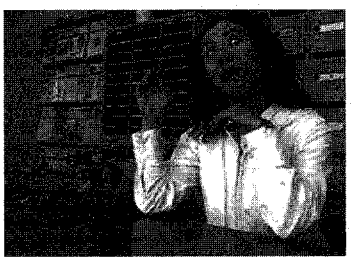





資料 7

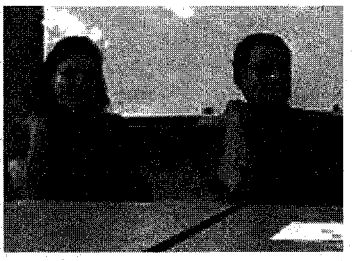






資料 8

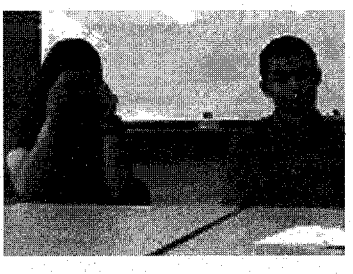




資料 9







資料10






資料11






資料12





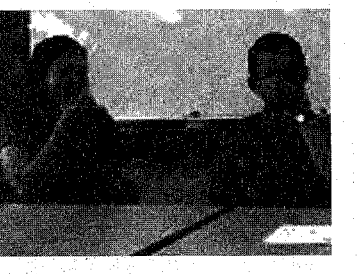






資料13





資料14








資料15






資料16



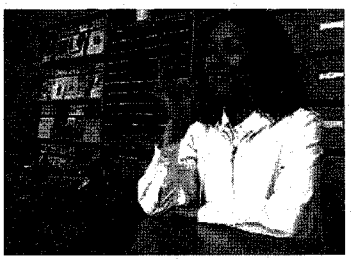

資料17

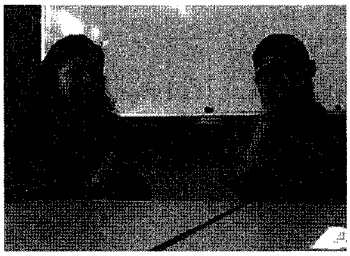







資料18



資料19



